

野球の種 地域に根ざす

少年野球前史

日本における野球の始まりは、明治4（1871）年からお雇い外国人として来日したアメリカ人、ホーレス・ウィルソンが、当時の東京開成学校予科（現在の東京大学）の生徒達に野球を教えたのが始まりと言われています。

秋田県では明治18（1885）年に秋田医学校で細井修吾が生徒に指導したことや、明治19（1886）年に秋田医学校と師範学校の試合が行われたことなどが伝えられており、教育現場を中心に広がっていったようです。

県内に広がった野球熱

明治33（1900）年、秋田県知事の武田千代三郎が秋田チャレンジカップ挑戦杯を創設し、優勝カップを賭けた野球大会が、6月17日から18日にかけて秋田市の千秋公園で開催されました。

「人山を築けり」と称されるほどの観客がつめかけた第1回大会を制したのが南檜岡倶楽部でした。

桜田鐵之助と富樫武治

南檜岡倶楽部は南檜岡尋常高等小学校の教員と生徒の混合チームで、主導したのが桜田鐵之助と富樫武治の2人の教員でした。

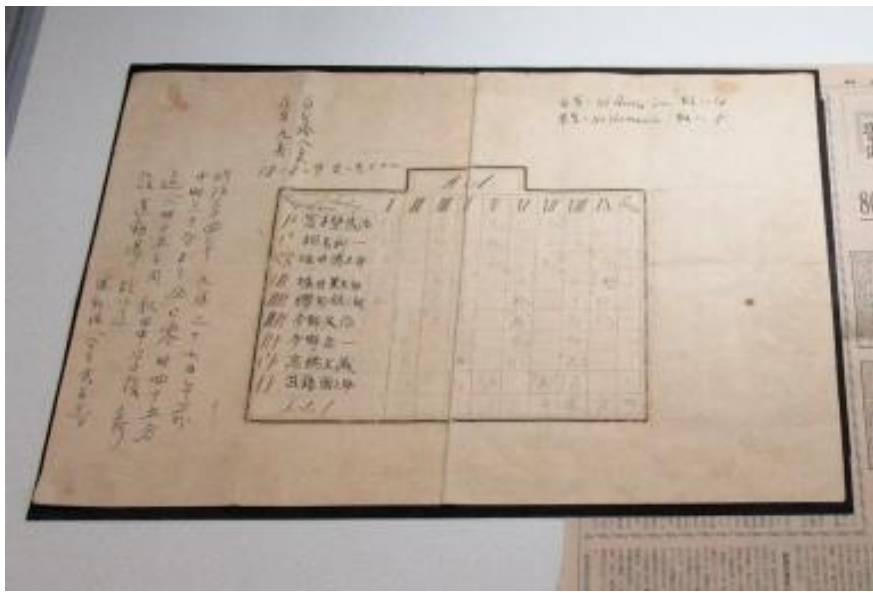
桜田鐵之助は、明治4（1871）年に秋田市に生まれ、明治29（1896）年に坊田小（後の南檜岡小）に赴任しました。教育には心育とともに体育が必要であるという理念のもと、野球を指導しました。

神宮寺出身の富樫武治は、明治15（1882）年生まれ。鉾山技師であった父の都合で、学生時代を長く東京で過ごしていたこともあり、優れた野球技術を習得していました。明治32（1909）年、南檜岡小に赴任し、ここで桜田鐵之助と意気投合。共に野球に打ち込みます。

富樫武治、故郷の神宮寺へ

明治35（1902）年、富樫武治は神宮寺小学校に赴任し、監督として野球の指導に情熱を注ぎます。

富樫武治の発案で、選手には任命状が手渡されました。任命状を受け取った選手達は、野球が出来る喜びや、その責任を自覚したはずです。野球を通じて心身を育てた富樫武治の教えは、後に迎えた少年野球の黄金時代の基礎を築いたと言えるでしょう。



明治 3 4 年の野球のスコア

明治 34 年 9 月 27 日に行われた第 3 回秋田挑戦杯の試合スコア。南檜岡倶楽部と秋田中学が対戦し、9 対 18 で秋田中学が勝利した。（渡部分水家資料）



野球任命状

富樫武治の発案で、神宮寺尋常高等小学校の生徒たちに与えた、レギュラーポジションの任命状。（かみおか嶽雄館所蔵）



大正時代のバット

持ち主の渡部郁太郎は、秋田中学に進学して野球部主将を務めた。郁太郎の 2 年後輩が、現在の全国高等学校野球選手権の第 1 回大会（大正 4 年）で準優勝した。（渡部分水家資料）



渡部郁太郎の日記

渡部郁太郎が、大曲地域の野球大会に神宮寺倶楽部として出場、3 対 15 で敗れたことが日記に書かれている。展示のバットの持ち主（渡部分水家資料）

明治の球児 当時を語る

明治36（1903）年、神宮寺尋常高等小学校では、教員であった富樫武治の発案により選手に任命状を授与しています。任命状を受けとった一人である渡部弥八郎さん（明治23年生まれ）は、当時の思い出を次のように語っています。

昭和49（1974）年発行の『神宮寺のはなし』（高橋周蔵編著）から紹介します。

「野球第一選手中堅ヲ命ス」

私等高等4年の時のメンバーは佐々木誠亮が捕手、私は投手、高橋鉄治がファースト、佐々木和一郎がセカンド、（中略）監督は富樫武治さんで、この人は神宮寺の人だが、南檜岡の先生をしていて野球をやり神宮寺へ転任してきて野球を教えました。毎年選手に任命状を渡す式をやり、これをもらう時は歓喜と興奮で顔をほてらしたものでした。

家業優先の時代に

私等より2級上はしょうずな人たちが多かった。サードをしていた新町の前田時治、投手は本郷の佐々木鉄治という、とてもうまい人であったが、家が農家で常に手伝いで忙しかったが、どこかと試合となると必ず迎えに行った。「男の末っ子で百姓仕事になれさせねば」と家人はいったが、ピッチャーの継手がないためどうにもならなかった。

私の家でも家業の蹄鉄やカジ屋で忙しかった、（中略）「野球やってママ食ってゆけるか」といわれるのがつらかったので、朝は一時間も槌討（トンテンカン）をやってできるだけ手伝ってから学校に行った。しかしそうした中にも父は理解があって、私をすじ向いの夜学塾に通わせてくれた。

足はもちろんハダシ 用具は小遣いを積立

私の野球の頃は14・5才の時です。捕手はミット、ファースト・セカンド・サードは固いグローブ、それは皮の手袋に球よけのため三日月型に切った皮をもう一枚はり足して痛くないようにしたものでしたが、それでも相当痛かったものです。あとの人たちはみんな素手で球をつかみました。服装も普通の仕事着で足はもちろんハダシです。注意していないとナマ爪をはがしたり、よく指の付根などに肉裂けができて苦労しました。

役場では予算がなかったし、ミット、グローブを買ってもらえず、全校生徒に強制しなかったが多くの人たちが1日に2厘ずつ、金のある人は5厘ずつ出し合ってしばらく積み立てて物を買いました。（1円＝1,000厘）

見に来てくれることは何よりの励み

野球を見に来てくれた人はいつも佐々木広之輔さんのお父さんだけでした。見に来てくれるということは何よりの励みになりました。

その後、大正13年あたりになると、よく町中応援に来ていたと思います。小西清造さんは郵便局長でしたが、大の野球好きで試合があれば頼まれてユカタを着たまま、尻端折^{はしよ}りで出て審判を引き受けたし、富樫ツル子さんも娘テイ子さんをつれて観戦にきていました。娘さんはモダンな服装でパラソルをさし、応援団を引き受けたツル子女史とよく欠かさず来ていたものでした。

富 樫 武 治 （明治15年～昭和13年）

明治15（1882）年、神宮寺の伝五郎家に生まれる。父が三菱鉱山の技師であったため、任地の都合で秋田師範付属小学校、神宮寺小学校、東京の文海小学校と転校を重ね、東京の郁文館中学校を経て東京数学院を卒業した。富樫武治は郁文館中学校時代に野球の知識・技能を身に付けた。



明治32（1899）年4月、17歳の時に南檜岡尋常小学校に代用教員として赴任し教師と補習科生徒の混成チーム「南檜岡倶楽部」に所属する。投手として活躍し、富樫が投げるドロップやシュートは魔球と呼ばれた。

明治35（1902）年から明治37（1904）年まで神宮寺尋常高等小学校に勤務し、子ども達に熱心に野球を教えた。選手に任命状を手渡す式をやり、生徒たちは任命状をもらう時、歓喜と興奮で顔を紅潮させたという。

野球ばあさん「富樫つる」

無類の野球好きで、大会が始まると寄付金箱を持って一軒々回って歩いた。親子そろってスタンドの一番上から声援を送る姿は大会の名物で、ミスをした選手を少しでも野次る人がいたりすると、それにバットを投げつける熱血ぶりであった。神宮寺内外の人々の記憶に残る名物“野球ばあさん”だった。



第4回全県少年野球大会
神宮寺小Bチーム（尋常科）連続優勝
（大正13年）



第 5 回全県少年野球大会神小 A チーム（高等科）
優勝記念パレード（大正 1 4 年）



中川原グランドでの「神宮寺倶楽部」対「秋田鉄
道倶楽部」の試合風景（大正 9 年）



「神宮寺倶楽部」メンバー（大正 8 年）

進	渡	大	三	斉	船	佐	佐	小
藤	部	越	浦	藤	木	々	々	林
憲	郁	利	金	新	網	広	千	謙
吉	太	一	市	五	春	之	代	一
	郎	郎		郎		輔	三	郎